# 一〇月一九日（木）

夕方にパパッと幸弘のオフィスを訪れて、土産を置いたらサッサと帰るつもりだったのに、何故か年若い娘さんたちを前にして、居酒屋で日本酒を飲んでいる。華やかな彼女らにはあまり似つかわしくない、非常にオジサン臭い店だ。

当人らは周囲の目や私の考えなど全く気にせず、自分たちのペースでビールやつまみを頼んでいる。瑞希さんは早々に日本酒に切り替えた。

「そうか、そいつは災難だったね」

私が志津香とドライブ旅行に出かけている間に、思わぬ出来事があったらしい。

「でも、武藤さんが旅行にでも行かないと、いつまでも接点生まれなかったかもね」

「それはそうかも」

沙綾さんはビールを飲み切ると、通りかかった店員を呼び止めて、日本酒の銘柄が書いてあるボードを要求した。今は階下にあるらしく、女子大生っぽい店員は「少々お待ちください」と空きのグラスを大量に持って階段を降りて行った。

「でも、お兄ちゃん的には、沙綾さんより朋子さんの方が気ぃ使うわ、みたいに言ってたけど」

瑞希さんはグラスに並々と注がれた日本酒に口をつけ、一口啜ってグラスを小皿から引き揚げた。彼女のお兄ちゃん、晃くんでなくても、朋子さんを目の前にするとピリッとする。朋子さんより年長者であるはずの私でも、たまに緊張してしまう。

「弟もいるし、苦手ってことはないとは思うんだけど、なんか距離感が難しいんだよね」

見た目的にも性格的にもはっきりしていそうな沙綾さんに、男性が苦手という印象はない。むしろどんな男性でもいいように振り回す素質もありそうだけど、それも上手にいなす一輝くんが特別なだけであって、晃くんは彼女にとって「そこら辺の男性」と大差ない気もする。

アーティスト肌で気難しそうな人柄という点では、沙綾さんが距離感を図かねている晃くんよりも、彼女が懇意にしている一輝くんや瑞希さんの方が当てはま

りそうなもんだが、引っかかっているのはそういうことでもないのだろう。
「武藤さんの時はどうでした？ 奥さんのご兄弟とか……」
沙綾さんの問いが私に向けられ、ようやく「ああ、そういうことか」と腑に落ちる。とはいえ、志津香の兄や姉と出会ったばかりの感覚や気持ちなんて、全く覚えていない。親御さんとは別の緊張感があったような気はするが、それをどう乗り越えて、どう人間関係を構築して行ったかも覚えていない。
「ほぼ半世紀前の出来事だから、あんまり覚えてないな」
沙綾さんの落胆が、仕草に現れている。
「ご期待に添えず、申し訳ない」
私が軽く頭を下げると、彼女はハッとした表情で居住まいを正し、「こちらこそ、ごめんなさい」と謝った。私は「いやいや、気にしていないからいいよ」と彼女に言った。
「まぁ、赤の他人でもないし、友達とも違うし、独特な距離感、緊張感はあるだろうね」
とっさのフォローに、沙綾さんは「ですよね」と得意げな表情で言った。コロコロ変わる表情、大きな身振りは見ていて楽しい。
「まぁ、何度か会えば大丈夫じゃない？」
沙綾さんの横から、瑞希さんが笑いかけた。
「私とお兄ちゃんの兄弟だし」
長男の一輝くんと、末っ子の瑞希さんと気が合うのなら、真ん中の晃くんも大丈夫だろう。彼の顔を脳裏に思い描いてから、彼用の土産を買っていないことに気がついた。

初出　令和三年一〇月二六日　Mediumにて公開